

# 『西欧の眼の下に』における アイデンティティーの問題 —ラズーモフの心象と大地の風景—

渡 邊 浩

**Abstract** *Under Western Eyes* (1911) is a unique novel which depicts Russia in its last years of Czarism. Conrad criticizes the Russian autocracy, which brought about a cruel and barren situation that depressed the people in Russia including the protagonist, Razumov, who is an orphan and a solitary student in St. Petersburg. This novel also includes a description of the rather complicated mental situation of the protagonist, that is, the collapse of his old identity as a Russian only based on his social background and the birth of his new identity as a humanistic individual. Moreover, the author uses impressive depictions of the earth in this story. At first, the earth is covered with snow and ice, which represents the frozen and bleak mental state of the protagonist and the people, caused by the Russian autocracy. At the beginning of the story, Razumov is a loyal student on the side of the establishment, however, a serious case of terrorism changes his life and thinking suddenly. These situations are reflected in changing views of the earth as well. Some characters who symbolize paternal affection in Russia and maternal or feminine affection in Geneva also influence Razumov's identity. Through these influences, he gains his new humane identity, but, at the same time, he loses his social status and support related to the establishment. Conrad emphasizes the restoration of humanity both in people and in a nation through the recovery of the young man's humanistic identity.

## 1. はじめに

『西欧の眼の下に』(*Under Western Eyes*, 1911) (以後『西欧』と略記)は19世紀末のロシアにおける政治状況を映し出しており、またコンラッド(Joseph Conrad, 1857-1924)もその序文で述べているように、ロシアの民

衆心理を描く心理小説として重要な作品でもある。<sup>1</sup> その二つの要素があいまって作家の代表作としての重厚感を生み出しているといえよう。主人公ラズーモフ(Razumov)の個人的な悲劇が、民衆の自由への希求を妨げるロシアの専制主義を象徴的に具現することにより、巧みに当時の崩壊しつつあるツァーリズムと荒涼とした政治風土を映し出している。作家は人間の心理と、彼らを取り囲む環境との関係を描写している。この作品に関しては、登場人物たちの心理の他に、環境、特に大地に関する描写が頻繁に登場している点に気づかされる。作品の序文においても、作家がラズーモフに祖国と結びついた象徴的な意味合いをもたせていることが示されている。

Being nobody's child he feels rather more keenly than another would that *he is a Russian—or he is nothing*. He is perfectly right in looking on all Russia as his heritage. *The sanguinary futility of the crimes and the sacrifices seething in that amorphous mass envelops and crushes him.* (“Author’s Note,” ix イタリック筆者)

上記のように主人公は「自分がロシア人以外の何者でもない」と明記されている。そして彼はまたロシア体制の犠牲者にもなるわけである。この作品は専制政治が生み出す「国家主義」的な人格とそれに対立する「人間主義」的な人格とを対比させることにより、ロシアの政治体制への告発を示している。<sup>2</sup> そして主人公が国家の歯車としての存在から、人間としての自我に目覚めてゆく物語でもある。

コンラッド作品の舞台を考えてみると、彼の著名な作品には、それぞれの背景と登場人物たちの心理に深い相関関係が感じられる。例えば『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899)におけるコンゴ川流域の様子や『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)におけるマレー地域のパトゥーサン(Patusan)部落、『ノストローモ』(*Nostromo*, 1904)における南米の都市スラコ(Sulaco)など、限られた地域を舞台に人間模様が展開され、地理的な描写が登場人物たちの心理や言動、また物語展開に独特の雰囲気を与えている。たとえばコンゴ川をさかのぼるマーロー(Marlow)の心理は、文明の進歩と退歩の問題を読者に投げかけ、西欧文明からはじき出されたジム(Jim)のパトゥーサンでの運

命は、異文化の中に取り残された人間のアイデンティティーを考えさせる要因となり、またノストローモ(Nostromo)の人生は、北米キャピタリズムに影響され墮落する人間と国土の様相を映している。もちろん物語の舞台に問題性をもたせない作家などいるはずもないが、コンラッドに関しては物語の人物と舞台の関係に特別なこだわりを見せているといえる。

『西欧』において、物語は二つの都市で展開される。一つは主人公ラズーモフの祖国、ロシアのペテルスブルグ(Petersburg)であり、もう一つはスイスのジュネーヴ(Geneva)である。その二つの都市において、ラズーモフの運命は大きく変化し、また物語自体も、文明の比較と批判の要素が色濃く盛られてゆく。西欧人でありイギリス人でもある老紳士「私」(“I”)が英語教師として登場し、ジュネーヴにおいて、主人公ラズーモフの日記を手にかつることになり、その内容に基づいて回想的に物語を語る展開となっている。

当初ラズーモフのアイデンティティーはロシア人以外の何者でもなかった。しかも孤児という環境である以上、個人的な人間関係が大変希薄な状況であった。コンラッドがなぜこのような人物設定をおこなったのかという点に関しては、他の作品を分析してみても同様な疑問を想起させる展開がある。代表的な短編である「エイミー・フォスター」(“Amy Foster,” 1901)においてもエイミー(Amy)の夫ヤンコー(Yanko)は東欧出身の身元が不明瞭な若者として登場し、『闇の奥』のクルツ(Kurtz)もベルギー人あるいはフランス人らしき人物、『ノストローモ』においても主人公はイタリア系移民の職長という具合に、主人公たちは、はっきりと地元根付いた人物ではないのである。元来異邦人として、文化的アイデンティティーが不明瞭な人物たちが、様々な人生の局面に接した際に、どのような人格的な影響や変化をきたすのかという点が、作家にとっては大きな問題点ではなかったのかと考えさせられる。主人公たちの多くは本来のアイデンティティーを見失い、滅びの結末を迎えることになる。そのようなエゴと向き合う体験を描くためには、孤立した環境と精神状況が必要であったに違いない。<sup>3</sup>

この物語の特徴は、何よりもロシアの専制政治が醸し出す荒涼とした人々の生活とその風土を巧みに描き出している点である。その背後にある東欧的な不可解な精神性も描写されている。そのことによりかなり複雑で

微妙な登場人物たちの心理が描き出され、さらに文明論的な批評の視点が取り入れられているのである。そして二つの文明の基盤と言えるロシアとスイス、ペテルスブルグとジュネーヴという設定が、異なる文明の比較と批評の軸となり、ラズーモフの心理と思想の変化を映し出すことになる。この作品の秀逸性は単なる国家の体制批判に終始するのではなく、あくまでも文学的な視野で心理小説としての悲劇に昇華されている点である。この作品で自己のアイデンティティーに対する懐疑と崩壊という問題を抱えた主人公の悲劇を描くことにより、その残酷さをもたらしたロシア体制の批判を行っているのである。

この論考においては、主人公ラズーモフが、自ら育ってきた環境とは異質の政治・文化的な思想・価値観に遭遇することにより、一度過去のアイデンティティーの崩壊を招き、新たなアイデンティティーの自覚に立つ経緯を分析する。またそれに対応して描かれる象徴的な大地の姿を通して、作家が表現する国土と人々また主人公の精神世界を合わせて考察する。

## 2. 人間関係と「信頼感」

ラズーモフの心理状態は、作中では大地の描写に密接に関係していることがわかる。また作家は、彼が強調する心理描写を大地の鏡に反映させているともいえる。冒頭ではラズーモフ自身がロシアの子であり、またロシアが親であるという描写を行い、彼とロシアという国家自身を一体不二なものとして描写している。

He was as lonely in the world as *a man swimming in the deep sea*. The word Razumov was *the mere label of a solitary individuality*. There were no Razumovs belonging to him anywhere. *His closest parentage was defined in the statement that he was a Russian.* (10-11 イタリアック筆者)

国家全体が激動の時代を迎えつつあることはラズーモフも感じてはいたが、その深い孤独のゆえに、他者と連携することもできずに彼自身が「深い海を泳ぐ男」、「孤独な人間のラベル」に過ぎないという表現で描写されている。このことにより彼は、自分自身のはっきりとした自我をもつ人物では

なく、ロシアという国家体制の中で生きる、あるいはそうした市井に住む非常に孤独な青年を代表し、また象徴しているのである。

『西欧』における場面設定では二つの世界的な都市が舞台となっている。しかしラズーモフが常に孤独であることには変わりはない。彼はまず祖国ロシアの地でテロリズムに遭遇するまでは自分の出自と自我に関しては特に疑問をもつ様子ではなかった。コンラッドが先程の序文で、ロシアを揶揄するかのよう、得体の知れぬ「非結晶体」(“amorphous mass”)と述べているように、ラズーモフ自体、当初は自分の価値観にのみとらわれていた不完全な非結晶体のような存在であった。したがって体制の中で作られた自分の生き方や人生観にも疑問をもつことはなかったのである。しかしテロリスト、ハルディン(Haldin)に遭遇することにより、異質の価値観と人生観に出会うことになる。そして大きな変化を生じるのである。すなわち別の価値観へと結晶し始めるのである。「私」は読者に対して話の筋道がそれたことを詫びながら、ラズーモフの運命と心理が大きく変化してゆくことに言及するのである。

But I must apologize for the digression. It proceeds from the consideration of the course taken by the story of Mr. Razumov after his conservative convictions, diluted in a vague liberalism natural to the ardour of his age, *had become crystallized by the shock of his contact with Haldin.* (67 イタリアック筆者)

内務大臣を爆弾テロで暗殺したハルディンは逃げ場を失いラズーモフの下宿を訪れ、かくまってくれるように頼む。しかし彼らは特別な面識があるわけではなかった。ハルディンの方が一方的に、孤独なラズーモフを高潔な人格を持ち合わせている同志と思い込んだ結果であった。しかしラズーモフは物語の設定上、ロシアの体制の中で生きねばならない宿命を担っており、真っ向から価値観の違う人物と相対することは初めての経験であった。すなわち彼の価値観からすると、ハルディンは一番出会いたくない人物であり、また最も理解に苦しむ信念をもつ存在といえるわけである。極めつけはハルディンから「信頼感」(“confidence”) (19)を感じたから彼

のところによってきたと告白されることである。身寄りもなく、また信頼できる友人がいないラズーモフにとって、人間関係における「信頼感」という言葉は、最も縁遠い存在であったに違いない。忌み嫌う相手からいきなり「信頼感」という言葉を聞いて彼の心は大きく動揺する。この点に関してジョンソン (Bruce M. Johnson) は、『秘密の共有者』 (*The Secret Sharer*, 1910)の登場人物レガット(Leggatt)とハルディンの行動に関して、船長とラズーモフの彼らに対する対応を比較する。

Neither Razumov nor the captain in 'The Secret Sharer' can believe that a murder, simply and without qualification, is a murder; any such oversimplification kills the moral life of both stories. In both confrontations, then, there is a marginally criminal act to be shared despite great dangers to the captain and to Razumov. *Interestingly, although the captain shares the crime and Razumov refuses to, both decisions tend to evoke the same human issues.* (158 イタリアック筆者)

レガットは受け入れられるが、ハルディンは拒否されるのである。しかし二つの作品には、「信頼感」は秘密を共有するだけではなく互いの「人間性」を知ることに基づく必要があるというメッセージが込められているように考えられる。船長はレガットの秘密を守り相手を理解しようとする。そして最後には互いの信頼感も獲得することになる。対照的にラズーモフの人間関係は自分の人生目標を中心とした利害に基づくものであり、国家や体制からの評価を受けることが主な目的であった。彼は、人間関係や友情が信頼感に基づくものであるという発想を初めて耳にして、そのような考え方があるのかと驚いたに違いない。この時彼は、一度はその感情の受け入れを拒否するが、この言葉は物語の終末に至るまで、彼の人間関係に影響を及ぼすことになる。また彼がこの「信頼感」を基にした人間関係を求める方向へ進むことにより、物語が展開してゆくと考えても過言ではないのである。

### 3. ロシアの大地と父性

ハルディンに逃亡の手助けを依頼されたラズーモフは、一度はハルディ

ンの頼みを聞き、逃亡の手助けをするはずのジーミアリッチ(Ziemianitch)への連絡を引き受ける。ところが彼は、ジーミアリッチが泥酔して眠り込んでいる様子を目の当たりにして思わず暴力を加えてしまうのである。そして再び人生に対する矛盾と怒りを感じながらハルディンの待つ下宿へと足を向ける。それは相手に対する怒りというよりも、予期せぬ状況で自分が追い込まれた窮地と矛盾に対する怒りであった。

Razumov stamped his foot—and under the soft carpet of snow felt *the hard ground of Russia, inanimate, cold, inert, like a sullen and tragic mother hiding her face under a winding-sheet—his native soil!—his very own—without a fireside, without a heart!* (32-33 イタリアック筆者)

この描写でもわかるように、彼は自分を追い詰める状況を、祖国の「大地」とその環境のせいにし、怒りをぶつけるのである。彼はロシアの子であったために、彼を今まで育ててきたものもその国土であり、また彼の運命と怒りを閉じ込めるのもその大地であった。

上記のように彼が生まれた大地が、「凍てついた硬いロシアの大地」と形容され、「生氣のない、冷たく動かない、不機嫌で痛ましい母のような(大地)」と描写されるのである。本来マザー・アースとしての暖かさや包容力を象徴する存在を真逆の凍てつく大地として表現している点は、まさに主人公の孤独と絶望が表象されている部分であろう。またこの場面には、本来豊かで温かい大地が、荒涼としたロシアの政治風土に覆いつくされていることへの揶揄も込められているのである。さらにこの状況を敷衍するかのようにラズーモフは自己の境涯を嘆きながら、自分を取り囲む大地と天空を見渡し感慨に耽る。

Under the sumptuous immensity of the sky, the snow covered the endless forests, the frozen rivers, the plains of an immense country, obliterating the landmarks, the accidents of the ground, levelling everything under its uniform whiteness, *like a monstrous blank page awaiting the record of an inconceivable history.* (33 イタリアック筆者)

大地を覆いつくす雪は全てを飲み込んでしまうような広大さと静けさを伴って彼の心も覆いつくすようであった。一人一人の運命を飲み込んでしまう雪への喩えは、一人の重要性を無視した国家の表象でもあり、またその冷酷さを表しているようでもある。「歴史が刻まれることをまっている巨大な白紙」という表現がなされているが、この時点でラズーモフはあくまでも自分自身も国家の一部であり、自分を取り巻く環境自体が国家全体をさすものというとらえ方しかしていない。自分自身の自我、独自性というものに対し強い関心はなく、あくまでも自分が巨大国家と組織の一部であるという認識しかなかった。彼の人生観や法を遵守することが正義と信じ込んでいたので、ハルディンに官憲に密告する決意をするのである。

しかし、物語が進むにつれて、彼は自己の存在と独自性、独立性というものに目を向けなくてはならなくなる。当然それはテロ事件が契機であるが、大きな危機に際して自らの立場と行動、人生の方向性の選択を自分自身が考え決断しなければならない立場へと追い込まれたからである。この時点から彼の視線と思考の方向は外の世界に属する自分ではなく、自分と内面との関わりに向かうことになる。「巨大な白紙」という表現は、確かに冷徹な物言わぬ国家を表現する言葉ではあるが、彼自身の一人の人間としてのアイデンティティーを表すものでもあった。すなわち孤児として成長し、社会や家族との親密な関わり合いと経験をもたないラズーモフの個人的な自我は、社会的な立身出世を目論む一学生として以外は殆ど白紙であったといえるのである。そして初めて自我というものを強く意識し始めた彼は、その軋轢に悩み、白紙だった人間性のアイデンティティーに自ら歴史を書き込んでゆくことになる。

以上のようにラズーモフにとって人間的なかわりあいが描写される場面は希薄であるが、第一部に関して唯一 K 公爵(Prince K—)との出会いが父性を感じさせるものとして描かれている。彼は匿名でラズーモフに対して資金援助を行っている老貴族として登場するが、ラズーモフも薄々は彼が実父ではないかと感じているのである。ロシアでの彼との出会いが唯一ラズーモフが人間的なぬくもりを感じた機会ということが出来る。ラズーモフは事件が発生する以前に一度だけ弁護士を通じて K 公と会う機会があった。



But the most amazing thing of all was to feel suddenly a distinct pressure of *the white shapely hand* just before it was withdrawn: *a light pressure like a secret sign*. The emotion of it was terrible. *Razumov's heart seemed to leap into his throat*. (12 イタリアック筆者)

K 公の「白く形の良い手」と握手をした際「ラズーモフの心臓は飛び出しそうであった」と描写されるように、ラズーモフにとって彼との出会いは強く記憶にのこるものであった。握り返された時の感動は、彼にとって初めての肉親からの愛情表現であったに違いない。K 公との経緯は、テロ事件に巻き込まれることによりさらに複雑で発展的なものへと変化してゆく。ハルディンに官憲に渡そうと決意したラズーモフは、最初の相談相手として K 公の許を訪れるのであった。すなわち他に相談できる相手が思い浮かばなかったのである。ラズーモフにはそれほど人間関係が希薄であった。K 公は当然驚くが、彼を助ける約束をし、T 将軍 (General T) のもとに連れてゆく。そして最後にその将軍がラズーモフを腹心の顧問官ミクーリン (Mikulín) の手にゆだねるのである。ラズーモフはハルディンを密告したとはいえ、テロリスト仲間たちとの関係を疑われるのではないかと常におびえていた。それを見透かすかのように、ミクーリンはラズーモフにヨーロッパにおけるテロリストたちを探る任務を依頼することになる。

元来この物語は老語学教師の「私」がラズーモフの日記をもとに自分の心境を語る内容であるが、「私」自身も自分の使命が単に物語るのではなく、地表を支配する精神世界を読み解くことであると理解している。

The task is not in truth the writing in the narrative form a *precisé* [italics in original] of a strange human document, *but the rendering—I perceive it now clearly—of the moral conditions ruling over a large portion of this earth's surface*; (67 イタリアック筆者)

そしてロシア全体を覆う精神性を表す言葉として「シニシズム」 (“cynicism”) (67) に思い当たる。ラズーモフの波乱の人生も、自分と他者の両方のシニシズムに影響され翻弄されたといえるであろう。最初の K 公

との出会いにより、ラズーモフは初めて家族的また人間関係としての感情を感じ、白紙であった自分の精神史の部分に、少なくとも人間的な愛情というものゝ刻まれることになる。いわば初めて父性というものを経験したわけである。ところが残念なことは、彼の父性にまつわる人間関係は全て国家体制と権力に結び付くものであった。K 公から始まり、T 将軍、更にはミクーリンもすべて帝政ロシアを支える組織のメンバーであった。元来体制側の歯車として生きようとしたラズーモフにとって、そのような結果が生じたとしても当然であった。しかし、国家の体制と人間の愛情とは本来別のものであるはずなのだが、この点に関して二つの要素が結びついてきたことは、彼にとって不運であった。このことが後に彼のアイデンティティーに深刻な影響をもたらすことになる。<sup>4</sup>

K 公に同意を得てラズーモフと話すことになったミクーリンは、彼に様々なことを問いかける。ミクーリンこそは、とらえられたハルディンに対して反逆罪で絞首刑の執行を命令した人物であり、ラズーモフの下宿の家宅捜索も行ってた。ラズーモフははっきり容疑者としての尋問を受けていると勘違いしたのであるが、家宅捜索の際に発見された彼のメモ書き、「歴史を肯定し理論を否定する、愛国心を肯定し国際主義を否定する、発展を肯定し革命を否定する、管理を肯定し破壊を否定する、統一を肯定し分裂を否定する」(“History not Theory. Patriotism not Internationalism. Evolution not Revolution. Direction not Destruction. Unity not Disruption.”) (66) に対してミクーリンは国家にたいする忠誠心であると評価した。この五つの対立軸は、まさにラズーモフの精神の対立軸となり、最終的に彼を引き裂くことになる。ここでラズーモフは自分が疑われているか否か確かめるためにその場を退室しようとした。そのときに、ミクーリンは「どちらに」(“Where to?”)と問いかけるのである。この間はまさにラズーモフの帰属を尋ねる言葉であった。

*“Where to?” was the answer in the form of a gentle question to what we may call Mr. Razumov’s declaration of independence. The question was not menacing in the least and, indeed, had the ring of innocent inquiry. Had it been taken in a merely topographical sense, the only answer to it would have*

appeared sufficiently appalling to Mr Razumov. (293-94 イタリアック筆者)

「どちらに」という言葉はラズーモフが下宿以外に帰る場所がないという単純な暗示ではなく、彼が人生の方向性を歪められたその場所へ、更には彼を決して放すことがないロシアの凍てつく大地、専制の国家体制に帰るしかないことを意味していた。すなわち彼の帰属は他にないことを暗示していたのである。その証拠にミクーリンはラズーモフに対し、君は必ず「ロシアの偉大な精神」(“Some of our greatest minds”) (295)と同様に最後には必ず還ってくると断言するのである。

#### 4. フェミニズムと女性たちの愛情

ジュネーヴではラズーモフが思想家ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の像を眺めながら物思いにふける場面が登場するが、民主主義思想の牙城とも言うべきジュネーヴと専制主義ロシアとを対比させる作家の意図が窺える。<sup>5</sup> またこの地から西欧人の「私」が報告と分析を行う設定は、まさしく西欧側から不可思議な国ロシアを考察する設定としては対照的な視点と言えよう。また舞台となる地域はロシア移民たちのコミュニティ、また特別区のような一画であり、自由であるがゆえに、多様な人物たちであふれていた。そうした複雑な文化を抱え込む都市を対局に据えている点は、地理的な対比だけでなく文化的な対比も加えられていることが窺える。ラズーモフがスパイ活動のために潜入することになったジュネーヴでは、皮肉なことにハルディンの母親と妹のナターリア (Nathalie) が、ハルディンの手配によって先に亡命していたのである。このジュネーヴの地で語学教師である「私」はナターリアに英語を教えることになり、後に彼女からラズーモフの日記を預かり、回想的に物語を語る設定となっている。

ナターリアは純粋な感受性でロシアの政治風土と体制を批判し、「私」はその分析を行う。ジュネーヴは、表面的には民主的都市の象徴として描かれている。また世界中から様々な背景と過去を背負う人物たちが流入し、そこに集うテロリストと無政府主義者たちの群像が物語後半の主要部分を構成することになる。

しかし、ラズーモフが時々思索に訪れるルソー公園の印象はあまり明る

く描かれてはいない。

On setting his foot on it Razumov became aware that, except for the woman in charge of the refreshment chalet, he would be alone on the island. *There was something of naive, odious, and inane simplicity about that unfrequented tiny crumb of earth named after Jean Jacques Rousseau. Something pretentious and shabby, too....* If solitude could ever be secured in the open air in the middle of a town, he would have it there on *this absurd island*, together with the faculty of watching the only approach. (290 イタリアック筆者)

厳しく残酷な祖国しか知らないラズーモフが、この地の雰囲気や軽く表層的な象徴と感じていた様子が窺える。またさらに踏み込んで、思想的なものや文化的なものは市民の生活に反映されて初めて価値あるものとなり、象徴的なものに置き換えることなど無意味であるという意図も窺える描写でもある。ここの描写においても作家はこの狭い一面を一つの象徴的な「土地」ととらえ、またその地形を背景に「滑稽な島」とも表現しているのである。<sup>6</sup>

第二部以降に登場するこの地ジュネーヴでは、ラズーモフの価値観と人生観の大きな変化が描かれることになる。特にこの地においては女性の活躍が詳述され、ラズーモフはそれら女性たちとの関わりあいの中で心境が変わってゆく。また逆に男性の登場人物たちはピョートル(Peter Ivanovitch)をはじめ小男の理論家ラスパラ(Laspara)、殺し屋のニキータ(Nikita)等、胡散臭いテロリストや活動家が中心となり、ほとんど「私」のみがまっとうな人物と言える状況である。この地において怪しげな男性たちと誠実な女性たちの活躍が対比されている。

『密偵』(*The Secret Agent*, 1907)や他の短編「密告者」(“*The Informer*”, 1906)などでも描かれているように、コンラッドはテロリストたちに対しては決して同情的ではない。そして世の秩序を乱すものに対しては一貫して批判的である。しかし唯一ロシアの専制主義に対する破壊活動、テロ活動に関しては同情的に描いている部分も確認されるのである。例えばハルディンのテロ事件にしても必ずしも批判的に描いているわけではない。むしろラズーモフに自己省察のきっかけを与える事件として登場させている。また

ジュネーヴのハルディン母娘も息子と兄の正義を信じているのである。さらにはその地に集う革命家たちも、男性は別にしても、女性活動家のソフィア・アントノヴナ(Sophia Antonovna)などは純粋な革命思想の持ち主として好意的に描かれている部分もある。

ジュネーヴの地において、ラズーモフは主要な女性の登場人物たちと出会うことになる。そしてこの地で、女性が中心となる展開を示すという点において、対照的な問題提起となる人物が登場する。それは国際的な革命家兼フェミニストとして知られていたピョートル・イヴァノヴィッチである。彼は、表向きは自分を英雄視するような自叙伝を公開して売名行為のようなことを行っていた。しかし彼のもとで働いたことがあるテクラ(Tekla)によると、自分の目的のためには徹底して女性もこき使うとんでもない人物として描かれ、彼女はナターリアに対してもピョートルに近づかぬように忠告するのであった。

このような極端な二面性をもつ人物を登場させることにより、似非フェミニズムを弾劾するとともに、作家は、実際に女性の愛情と活躍を許容する状況をこのジュネーヴの地に展開するのである。このピョートルという名前にしてもツァーリズムの確立者、皇帝ピョートル(Pyotr I Alekseevich, 1672-1725)を連想させるものがあり、名実相反する人物を揶揄する設定といえる。ロシアのテロリストは反体制主義者となっても独裁的で偽善的であるという痛烈な皮肉ともとれるのである。

ジュネーヴにおいて主要な女性たちが登場する設定は、ラズーモフにおける政治や文化の価値観、そして何よりも自我の再形成に関して様々な影響を与えてゆく。ロシアの凍てつく大地で彼が得たものは権威主義と結びついた父性的な愛であるが、それが彼を不幸な状況でジュネーヴまで送り出す形となった。これとは逆にマザー・アースとしての愛情や温もりを表す象徴として女性たちが登場したのである。結果的にナターリアは女性たちのシンボリックな存在として描かれ、ラズーモフにとっても理想的表象としてとらえられるのである。この点に関してウィナー(Anthony Winner)は、ナターリアの純粋な性格がラズーモフや「私」の心をとらえる経緯を指摘する。それが最終的に権力に覆われた男性的な大地に影響を与え、女性的な革命につながるものとして解釈している。

*Nathalie's purity has from the beginning commanded her brother's, Razumov's and the narrator's profound allegiance. Now matured and strengthened, she speaks for the redemptive power of the crucial Conradian virtues that Sophia Antonovna proclaims to Razumov: for the saving instincts, faith, devotion, and action that forbid irony. Nathalie's valedictory is the prelude to the revolution that with Tekla and others like her she is about to undertake. She will bear a self resistant to irony, a life of feminine feeling tempered to the pitch of masculine action, into the homeland of irony. The teacher, with his decent sentiments and his empathy for the culture women incarnate, is the necessary spokesman for Nathalie's mission to men's earth. (119-20 イタリアック筆者)*

また様々なタイプのテロリストたちに出会うことになるラズーモフではあるが、彼に最も政治的な影響を与えた女性はソフィア・アントノーヴナであろう。彼女はピョートルとは異なり、純粋に社会革命を目指す闘士として描かれている。第三部の内容の多くは彼女との会話とやり取りに割かれているが、要するにラズーモフが抱いていた体制順応の価値観と反体制の価値観のぶつかり合いであり、どのような経緯で彼女が社会改革に挑戦してきたかというその半生も紹介される。当然のことながらラズーモフは彼女やテロリストのグループに対しては当初軽蔑と警戒心を向けていたが、純粋に自分の怒りと使命感を語る彼女に心ならずも共感を覚えないわけにはいかなかった。ソフィアは「巨大な社会の不公平さ」(“the great social iniquity of the system”) (262)を呪っていたのであるが、それは権威主義の国家と人間性の大地の対立軸の中で生み出されたものである。

市民階級に属しながらも知的エリートとして歩んできたラズーモフにとっては、極度な貧窮と圧制に喘ぐ民衆の実態というものに関しては、殆ど直接的な接触はなかったに違いない。しかしソフィアの実体験を聞くことにより、彼の孤立した価値観は揺らぐことになる。この時今まで軽蔑の眼でしか見ていなかったテロリストに対して、初めて一種の感動を覚えるのである。彼女は「成熟した人格」(“the mature personality”) (263)と評されているが、ラズーモフとしては、自分に欠けているものを彼女に見出したのである。それは純粋に信念を追及する一途さであり、またそれを貫ける女

性の強さと忍耐であった。

次に旧来の価値観が揺らぎ始めた彼にとってハルディン母娘は女性的な愛の象徴となる。物語の終末でラズーモフがナターリアに本心を伝える部分が登場するが、そこには愛情を知らずに育ってきた自分の心境が吐露されている。「私は自分の母を知らず、またどのような愛も知らなかったのです」(“I never knew mine. I’ve never known any kind of love”) (360)と打ち明ける彼にとっては、国家に対する忠誠心と社会的契約のみが価値観の基準であったことは前述のとおりである。

ナターリアはラズーモフが唯一恋愛感情をもつ女性として描かれている。彼女は兄ハルディンが手紙にラズーモフのことを好意的に書いていたので、兄の親友と思い込んでいた。彼がジュネーヴに来ている噂を耳にしたとたんに彼に会おうとしたのである。彼がナターリアに会った時の印象は以下のようなようであった。

*He had responded, as no one could help responding, to the harmonious charm of her whole person, its strength, its grace, its tranquil frankness—and then he had turned his gaze away. He said to himself that all this was not for him; the beauty of women and the friendship of men were not for him.* (167 イタリア筆著者)

彼女の人格から浮き出るような完成された美しさにラズーモフは一目で魅せられることになる。また自分の立場を理解し始めたラズーモフは、「女の美しさも、男の友情も自分にはもはや縁のないもの」として諦めようとした。なぜそのような人間関係と縁がない存在になってしまったのかを自分に問いかけることにより、ハルディンに言われた「信頼感」というものを知らずに過ごしてきた彼は、自分に欠けている人間関係における感情に気づいたといえよう。

次第にラズーモフの本心はナターリアとの交流を通して明らかにされてゆく。それはあまりに純粋な彼女の心に、彼の心が映し出された結果に他ならない。人間不信の環境の中で生きて来た彼にとって、家族や他人に対する彼女の純粋な感情や対応が彼の不信を取り除き、彼の凍てついた気持

ちは次第に素直なものに変わっていった。今まで透徹した眼で自分を見つめる機会のなかった彼が、初めて自分の姿と本心に向き合う機会を得たのである。

Suddenly you stood before me! You alone in all the world to whom I must confess. *You fascinated me—you have freed me from the blindness of anger and hate—the truth shining in you drew the truth out of me.* Now I have done it; and as I write here, I am in the depths of anguish, but there is air to breathe at last—air! (361 イタリアック筆者)

「あなたの中の輝く真実は、私の真実を引き出してくださったのです」と告白したことから、彼は自分の真実を映し出す鏡をナターリアの中に見出したと解釈できる。このように様々な女性との出会いにより、彼は人生において、自分の人格や価値観に影響を与える体験をしてゆくことになる。

彼に大きな影響を与えたもう一人の女性はピョートルに仕えていたテクラであろう。彼女はマダム・ド・S (Madame de S) のボレル館 (the Chateau Borel) で働きながらピョートルの秘書的な役目も果たしていたが、共和主義の美名のもとに非人間的に酷使された体験をもっていた。いわば彼女は「偽」の思想家、活動家に対する生き証人のような役回りなのである。マダムの自己満足的なパトロン根性を見つめ、また独裁的で非人間的なピョートルの偽フェミニズムや革命主義を告発するのである。そしてナターリアにボレル館で出会った時に、自分がやりたかったことをハルディンがやってくれたと感動の気持ちを吐露することになる。

彼女の場合は、ほとんど社会革命に幻滅を感じていた状況であった。その時耳にしたハルディンの活躍は真の英雄的行為に映ったわけである。後にハルディンを密告した張本人はラズーモフと分かり、彼が障害者となった時でもテクラは彼の看病を続ける道を選び、「良きサマリア人 (“a good Samaritan”）」(374)とも呼ばれるのである。自分が尊敬するハルディンを裏切った人物の世話をするテクラは、矛盾する行動をとっているともいえるが、彼女自身革命とテロリズムの犠牲者でもある。ラズーモフの身の上を知ることによって犠牲者としての同情も生まれた可能性もあり、またはじめから



彼女には献身的な女性としての意味合いが込められていたことも明白である。

ジュネーヴの地において、ラズーモフは様々な女性と出会い、自分に欠けていた女性の愛情というものを目の当たりにし、あるいは肌身に感じる機会をえる。それらはハルディン母娘の母性愛と家族愛であり、恋愛感情であり、また純粋に社会改革を訴えるアントノーヴナの強き祖国愛であった。またテクラの博愛も重要であった。いわばアレゴリーのように女性の愛情が様々なキャラクターに投影されているともいえるのである。<sup>7</sup> 国家体制における歯車としての自覚しかなかったラズーモフは、この地で大きく人間愛、特に女性たちによる愛情に感化され、最終的に罪を告白し権力との決別を選択することになる。

コンラッドは、この地での冒頭に偽善的な革命家・フェミニストであるピョートルを登場させることにより、形式的また教条的な思想に対する弾効を行っているのである。それは無責任で狂信的なテロリズムにも向けられていることは当然である。また物語の中で様々な立場の男性を登場させ、彼らに対して権威主義と結びつく役回りを与えている点が確認できる。こうした状況の中で、真のフェミニズムや女性解放は純粋な気持ちと女性の感情や愛情というものを理解したうえでなくてはなしえないことを訴えている。氷の大地のように閉ざされたラズーモフの気持ちや価値観は、そうした女性たちの純粋な気持ちと愛情によって溶かされたのである。

ロシアとジュネーヴとの対比における思想と文化に関連した対照的な描き方を作家は用意していたことが窺える。さらにテロリストたちの活動の中で、地理的な暗示が登場する場面がある。それは「私」がたまたまナターリアの付き添いとしてホテルを訪ねた時に、そこでテロリストたちの会合が開かれていた場面であった。ピョートルやアントノーヴナなどの主要メンバーも集まり、彼らは巨大なロシアの地図を見つめて計略を練っている様子であった。

「私」は後にバルチック地方で起きた軍事的な陰謀の失敗を知るのであるが、その計画がこの時なされたのだと気づくのである。「古く落ち着いたヨーロッパが、ロシアの娘に付き添っている私の中で、舞台裏をのぞくような機会が与えられた」(“the old, settled Europe had been given in my person

attending that Russian girl something like a glimpse behind the scenes”) (330) という描写から、ここでも西側とロシアという二つの視点の対比が行われている。ホテルの一室からテロリストたちが計画を企てている場面は、これからロシアに起ころうとする変革を予測させる場面である。「テーブルの上にロシアの地図だけがぎらぎらと光が当たっていた」(“with the strongly lighted map on the table”) (330) と描写され、西欧から見たその地の違い、またこれから起ころうとする変化等が示されている。その証拠にナターリアは、追いかけて来たアントノーヴナに声をかけられるのである。ナターリアに対する「あなたはもっと良い時代を見ることになるでしょう」(“You may see better times”) (331) という言葉は大きな暗示ともいえよう。

## 5. 結び

ナターリアは決してテロリズムの唱道者ではなかった。彼女はあくまでも純粋な気持ちでロシアの将来が明るくなることを願い信じていた。ラズーモフが良心の呵責に耐え切れず、ナターリアに真実を打ち明けた時、「私」は彼女の言葉「これ以上不幸なことがあるでしょうか。……心が氷のようになってゆくようです」(“It is impossible to be more unhappy....” The languid whisper of her voice struck me with dismay. “It is impossible.... I feel my heart becoming like ice.”) (356)を記録し、彼女の心が再び真冬の大地のように凍ってしまう様子を描写する。それはあたかも彼女の祖国改革を志す一途な気持ちと、それに対するロシアの荒涼とした現実が対比されているかのようである。しかし彼女の祖国を救いたいという情熱は最後まで揺らぐことはなかった。それは、「男たちの権力闘争で血塗られた大地から、調和の花が咲く」ことへの確信であった。

And on this last word of her wisdom, a word so sweet, so bitter, so cruel sometimes, I said good-bye to Natalia Haldin. It is hard to think I shall never look any more into the trustful eyes of that girl—wedded to *an invincible belief in the advent of loving concord springing like a heavenly flower from the soil of men's earth, soaked in blood, torn by struggles, watered with tears.* (377  
イタリック筆者)

この物語は常に二つの視点が対比されながら展開される。ロシアと西欧という視点はタイトルからすれば当然のことであろうが、さらに主人公ラズーモフの自我の乖離、すなわち国家体制の一部としての自覚しかない存在と、テロ事件をきっかけに新たに生じる人間性に関わる自我である。そしてほとんど白紙であった彼の人間性に関するアイデンティティーは、父性と様々な女性たちの愛情の影響を受け、多様な生き方と価値観が刻まれることになる。また「信頼感」という言葉の意味を感じ取った彼は、友情の意味も理解し、彼が裏切ったハルディンや弄んだコースチャ（Kostia）に対しても深い自責の念をもつのである。ついに彼は自分の空白だった人間性のアイデンティティーに人を愛する感情を刻むことができたのである。そしてそれに比例するように、彼の心象風景を映し出す大地の表象も変化を遂げる。ペテルブルグとジュネーヴ、そして生まれ変わろうとする祖国ロシアのイメージが対比され、主人公の心理同様に大地は変貌を遂げて、専制ロシアの残酷な政治風土を描く凍てつく大地は、明るい希望に満ちたマザー・アースへの変貌を予感させるのである。

ラズーモフは最終的に裏切り者のテロリスト、ニキータによって鼓膜を破られ障害者になり、ロシアの片田舎でテクラから看病を受けながらひっそりと、しかし心の平穏を取り戻したかのように暮らすことになる。ハルディンを裏切った彼が、裏切り者からの制裁を受けることにより、テロリズムのむなしさと残酷さ、そして彼の精神的重荷が取り除かれたことが暗示されるのである。彼は社会的な立場は全て失ったが、人間性に立脚したアイデンティティーと愛情を手にすることができた。それにより彼の胸中は安心立命であり、満足のゆくものであったに違いない。

彼の社会的な不幸は、権力と結びついた父性と反体制的な女性愛というものが彼の自我を一度は引き裂き、結局彼にその二者択一を迫ったことである。「私」に言わせると、そうした人間性に対する残酷さと不毛がロシアの不可解な部分に起因しているということになる。なぜなら国家に属しながらも個人の自由が保障されるのが社会契約の根本だからである。しかしルソーの社会契約の思想を手放しで受け入れているわけでもないコンラッドの考えには、人の精神性の自由とはそう簡単に手に入れられるものではないというアイロニーも見てとれるのである。

コンラッドは専制主義とそれに対抗するテロリズムに関して痛烈な批判を加えて序文の最後を結んでいる。<sup>8</sup>それは組織や体制に関することで、形や名称の変更や破壊を行えば人々の心の変革もできるという大きな誤解を指摘している。当時ロシアに吹き荒れていた専制主義とテロリズムの相克の中で、双方にこのような思い違いがあることを作家は憂いていたのである。この作品は、時代の転換点に立たされた一青年の新たなアイデンティティ獲得のプロセスを通して、人間性の復活、そしてそれに基づく体制と国家の再生を訴える物語となっている。

## 注

- <sup>1</sup> 『西欧』の序文には、コンラッド作品の中でも特に詳細に作家の創作上の意図や心理が吐露されている。

It must be admitted that by the mere force of circumstances “Under Western Eyes” has become already sort of historical novel dealing with the past.

This reflection bears entirely upon the events of the tale; but *being as a whole an attempt to render not so much the political state as the psychology of Russia itself*, I venture to hope that it has not lost all its interest....I need not say that in writing this novel I had no other object in view than *to express imaginatively the general truth which underlies its action, together with my honest convictions as to the moral complexion of certain facts more or less known to the whole world.* (“Author’s Note,” vii イタリアック筆者)

上記の記述にも明白なように、政治状況以上に人物の心理を描くことを重視し、事実と真実を表現しようという作家の強い意図が窺える。

- <sup>2</sup> ヘイ (Eloise Knapp Hey) はこの作品におけるコンラッドの政治的関わり合いから掘り下げ、政治風土とロシアの人々、更にはラズーモフの悲劇との関係を示唆している。コンラッドの政治小説分析として、政治体制が国民性を形成するという指摘は重要と思われる。

Conrad’s last political novel was tribute to the father, but tribute also to the common humanity and capacity for suffering of the Russian people. In *Under Western Eyes*, as in *The Secret Agent*, Conrad’s last word on politics seems to be

*that political institutions form the national character of a people. Razumov is human, but subjected as he is to autocratic despotism on one side and to revolutionary despair on the other; his tragedy is, according to Conrad, peculiarly Russian.* (312-13 イタリック筆者)

政治小説分析の古典として、ラズーモフの立場が体制側と革命側に引き裂かれ、その状況がロシア民衆の状況であり、さらにロシアの不可思議さであるという分析はある意味定説であろう。しかしラズーモフのアイデンティティーの再生というような視点は取られていない。

- <sup>3</sup> ロス (Stephen Ross) は、コンラッドの『ノストローモ』に関して、地勢に関する指摘を行っている。彼は他の批評家の意見を考察しながら、コンラッドにとって心理描写 (特に主人公の孤独) を表現してゆくことが最も大切なことであり、そのためには舞台である地名や地域はあくまでもそれを支える要素であると主張する。このことは『西欧』にも当てはまることである。またそれゆえに、コンラッドは特定の地域と主人公たちの心理や心情との関係を重視しているともいえるのである。

In recognition of this aspect of the novel, R. B. Cunnmghame Graham and Arnold Bennett stated in letters to Conrad that they thought of the novel as being named “Costaguana” and “Higuerota,” respectively, objecting to the narrow focus implied by “Nostromo.” In making these suggestions, however, Cunnninghame Graham and Bennett failed to see that *for Conrad, the fictional Republic of Costaguana, its mountain Higuerota, South America, and even the atmosphere of incipient global modernity were little more than setting if taken in isolation from their effects on individuals.* (114 イタリック筆者)

『西欧』においてもラズーモフがなぜ孤独に陥ってゆくのかという点は、物語の経緯として最も大きな要素の一つと考えられる。なぜならばそれ故に、主人公が自分に欠けている愛情と信頼感を発見するための経験を重ねてゆくからである。

- <sup>4</sup> ジョンソンはラズーモフの状況に関して、「激しい家族の不和」 (“violent family quarrel”) という喩えを用いているが、彼はまさしく権力とテロリストに代表される人民闘争の間で引き裂かれた犠牲者である。そして彼の場合は引き裂かれる人間関係がまさに家族的絆からできているのである。そうした意味で「家族の不和」という分析は適切であると考えられる。そしてさらにそのテロリストの側に立つ人々が全てジュネーヴにおける女性たちに重なりあう点が、ラズーモフのさらなる悲劇性に寄与するわけである。

*Now Razumov is indeed partly victimized by a 'violent family quarrel' which tears apart the source of his identity. All the other Russians in the novel more or less rely on the mystique of Holy Russia for their identity, but none so directly as Razumov and none as a would-be man of reason tragically seeking support for that ambition in a country and within an inherited psychology defined by mystical irrationality. (159 イタリック筆者)*

コンラッド作品には、異文化や政治の問題が人間関係を引き裂くプロットが頻繁にみられる。この作品においても、その要素が色濃くまた巧みに組み込まれているといえよう。

- <sup>5</sup> ルソーに関するコンラッドと『西欧』への影響について、パーンスタイン (Stephen Bernstein) は“Conrad and Rousseau: A Note on *Under Western Eyes*”の中で報告しているが、その影響関係の詳細を特定することは難しい。しかし国家と個人の権利関係を考察する点では、『社会契約論』の中に考えさせられる部分が見られる。その第一篇、第六章の一節に以下の部分が見出せる。

「各構成員の身体と財産とを、共同の力のすべてを挙げて防衛し保護する結社形態を発見すること。そして、この結社形態は、それを通して各人がすべての人と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由なままでいられる形態であること」。これこそ根本的な問題であり、社会契約がそれに解決を与える。(27)

『西欧』においては、ジュネーヴの場面において、個人の立場と社会契約の考え方が問題視されているように考えられる。社会契約は主に国家と自己に関連しており、『西欧』における悲劇は、まさに国家に物心ともに隷属しなくてはならなかったラズーモフの悲劇である。その反論としてジュネーヴの地で彼の価値観と心情が変化する点は、単なる偶然ではなく、人間の自由に目を向けさせようとする作家の入念な意図が感じられる。

- <sup>6</sup> ジョンソンは、コンラッドがポーランドの立憲君主制に関してルソーの提言を知っていたのではと推測する。しかしまたルソーの論が、コンラッドや彼の父親、またラズーモフが体験するような情熱的で不可解な感情を理論的に否定することに対しては、コンラッドも納得がいかなかったのではと推察する。

He may have been familiar in detail with Rousseau's recommendations to the government of Poland for a constitutional monarchy; but we may be sure that his understanding of the *Social Contract* was vividly colored by Rousseau's reputation as the father of the French revolution and of political 'freedom' in general, and that

he saw Rousseau as the son of Geneva, that dull, complacently rational denial of all that was passionate and mystical in Conrad's own, his father's and Razumov's social experience. (164-65)

したがってルソーを記念する公園やブロンズ像に対してラズーモフが明るい印象を抱かなかったことは、作家自身もルソーの理論に完全に賛同していたわけではないことを暗示しているのである。やはり西欧の理論と東欧の精神性には理解しがたいものがある点は作家自身も感じていたに違いない。

- <sup>7</sup> ウィナーは、ラズーモフと同様にテクラとアントノーヴナに関して、その性格を強調するために、かなり極端な描き方がされている点は認めている。しかし、最終的には女性として、人間性に結び付く描写をされている点を指摘している。

No less than Razumov, these women have been violated in the most vulnerable truth of their natures. They have emerged intensified to the point of archetype. Razumov vacillates in pain, a sport of horror susceptible to irony and moral judgment. The women seem to emerge as specters from a realm beyond the reach of irony and conventional standards. Yet part of what the narrator responds to involves, not irony, but simple humanity. (110)

この物語で描かれる女性たちは皆、祖国の体制を嫌いながらもロシア女性としての特色を表しているのである。そしてそれはまたロシアの変革に必用な特色であり、ラズーモフの価値観を変えるためにも必要な要素であった。

- <sup>8</sup> コンラッドの眼は、人間性の変革なしに、理論や名称の変更や破壊のみで国家や体制の変革が可能であると信じている専制主義やテロリズムに対して強い懸念を示している。そうした意味で、コンラッドの視点は冷静に西欧とロシアを対比しており、またどちらに偏った見方を示しているわけでもない。

The ferocity and imbecility of an autocratic rule rejecting all legality and in fact basing itself upon complete moral anarchism provokes the no less imbecile and atrocious answer of a purely Utopian revolutionism encompassing destruction by the first means to hand, in the strange conviction that a fundamental change of hearts must follow the downfall of any given human institutions. These people are unable to see that all they can effect is merely a change of names. The oppressors and the oppressed are all Russians together; and the world is brought once more face to face with the truth of the saying that the tiger cannot change his stripes nor the leopard his spots. ("Author's Note", x)

コンラッドは変革しがたいロシアの文化・歴史・政治風土といったものを如実に描こうとしたわけであるが、あくまでも「完全な公平性」(“absolute fairness”)を心掛けて真実を伝えようとしたと述べている。そして当初イギリスよりもロシアで作品が受け入れられたとも述べている。その理由をこの公平性のせいだと考えていたようであるが、そうした意味で、作家には真実と事実を伝えるということに関して、さらなる使命感を自覚したに違いない。小説である以上はつきりとした政策を分析することが目的ではなからうが、この作品には専制体制改革に関する多くの思いと助言が込められているといえよう。

### 参考文献

- Ash, Beth Sharon. *Writing In Between: Modernity and Psychosocial Dilemma in the Novels of Joseph Conrad*. London: Macmillan, 1999.
- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.
- Batchelor, John. *The Life of Josph Conrad*. Oxford: Blackwell, 1994.
- Bernstein, Stephen. “Conrad and Rousseau: A Note on *Under Western Eyes*.” *Journal of Modern Literature*. 19. (1994):161-63. Web. 1 December 2016.
- Collits, Terry. *Postcolonial Conrad: Paradoxes of Empire*. Routledge Research in Postcolonial Literatures. 12. London: Routledge, 2006.
- Conrad, Joseph. “An Anarchist: A Desperate Tale.” *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 11. London: Gresham, 1925.
- . “Gasper Ruiz: A Romantic Tale.” *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 11. London: Gresham, 1925
- . “Heart of Darkness”. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: Gresham, 1925.
- . “The Informer: An Ironic Tale.” *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: Gresham, 1925.
- . *Last Essays*, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 22. London: Gresham, 1925.
- . *Nostromo: A Tale of the Seaboard*, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 8. London: Gresham, 1925
- . *A Personal Record*, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 9. London: Gresham, 1925.
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 10. London: Gresham, 1925.



- . *Under Western Eyes*, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 12. London: Gresham, 1925.
- Guerard, Albert J. *Conrad: The Novelist*. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowers and Bowers, 1952.
- Hey, Eloise Knapp. *The Political Novels of Joseph Conrad*. Chicago: U of Chicago P, 1963.
- Johnson, Bruce M. “*Under Western Eyes*: Politics as Symbol.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 156-69.
- Kraus, Karl. “Connoisseurs of Terror and the Political Aesthetics of Anarchism: *Nostromo* and *A Set of Six*.” *Conrad in the Twenty-First Century: Contemporary Approaches and Perspectives*. Ed. Carola M. Kaplan et al. New York: Routledge, 2005. 137-54.
- Lisi, Leonardo F. Power, Truth and Play in *Under Western Eyes*. *Conradiana* 42 (2010): 107-122. Web. 11 October 2016.
- Moser, Thomas. *Joseph Conrad: Achievement and Decline*. 1957. Hamden: Archon Books, 1966.
- Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Life*. Trans. Halina Najder. New York: Camden House, 2007.
- Ross, Stephen. *Conrad and Empire*. Columbia: U of Missouri P, 2004.
- Winner, Anthony. *Culture and Irony: Studies in Joseph Conrad's Major Novels*. Charlottesville: UP of Virginia, 1988.
- アヴリッチ、ポール『ロシア民衆反乱史』白石治朗訳、東京：彩流社、2002年。
- 照屋佳男『コンラッドの小説』東京：早稲田大学出版部、1990年。
- 吉田徹夫『ジョセフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』東京：開文社出版、2002年。
- ルソー、ジャン・ジャック『社会契約論』作田啓一訳、東京：白水社、2010年。
- 。『人間不平等起源論』小林善彦訳、東京：中央公論社、1974年。
- 和田 春樹編『ロシア史 (新版 世界各国史)』東京：山川出版社、2002年。

(わたなべ ひろし 就実大学 教授)